イラストレイション=花井祐介

STRING THEM ALONG

ストリング・ゼム・アロング

文＝ジョージ・カックル

第2回

南部白人層のメンタリティに触れてみる

アメリカの南部とは、基本的には南北戦争で負けた州のこと。アラバマ州、ミシシッピ州、ジョージア州などだ。

ザ・バーズの**「ヒッコリー・ウィンド」**からは、南部ののんびりした生活の様子が伝わってくる。68年に出されたカントリー調のアルバム『ロデオの恋人（Sweetheart Of The Rodeo）』収録曲で、南部生まれ南部育ちのグラム・パーソンズが、小さいころに過ごしたサウス・キャロライナの思い出に基づいている。

サウス・キャロライナの松林で、そこにあった樫の木に僕たちはよく登ったものさ。こうして一人っきりになったとき、僕はいつもあのヒッコリーの風を思い出す。この最初のヴァースに、松、樫、ヒッコリーという3種類の木の名前を入れることで、グラムは自分の郷里のイメージを表現している。クルミ科のヒッコリーの若い枝や葉には芳香があるようだから、'Hickory Wind'とは、その香りが風に乗って漂う様を表わしているのだろう。その風を音で描くようなスティール・ギターがいい感じだ。

The Byrds
"Sweetheart Of The Rodeo"
Columbia●CS9670［1968］➔
ソニー◎SICP30414
incl.'Hickory Wind'

●

アラン・トゥーサンの**「サザン・ナイツ」**も、南部のゆったりした雰囲気が伝わってくる曲だ。南部の夜は風が木の間を通って、口笛みたいな音を奏でる。きれいな空が、昔の話を心の中に蘇らせる。犬の散歩をする老人の手には、あたりに咲く花が自然と手に触れる。枝垂柳（Weeping Willow）も、喜びの声を上げる…。

ちなみに、この曲は77年にグレン・キャンベルがカヴァーして、全米シングル・チャートの1位に輝いた。都会に住んでいたアラン・トゥーサンは、ルイジアナ州の田舎に住む親戚のところに遊びに行ったときのことを曲にした。それを耳にしたグレン

Allen Toussaint
"Southern Nights"
Reprise●MS2186［1975］➔
リプリーズ（ワーナー）
◎WPCR75407
incl.'Southern Nights'

©George Cockle / Record Collectors

が、自分が育ったアーカンソー州のことを思い出し、この曲を歌ったようだ。グレンによるカヴァー版「サザン・ナイツ」を収録した同名アルバムも、同じ77年に全米22位のヒット作となっている。

●

南部には、独特な食べものもある。最も有名なサザン・フードはグリッツだろう。ひき割りトウモロコシで作られた、おかゆみたいなものだ。また最近はあまり見かけないが、ポークという南部特有の植物で作られた料理もある。ポークには毒があって、よくゆがけば抜けるんだが、19世紀のころにはその毒で死んだ人も多かったという。南部では貧しい人たちが食べていたそうだ。トニー・ジョー・ホワイトの**「ポーク・サラダ・アニー」**（全米8位）は、そんなポークで料理を作る、田舎暮らしの貧しい家族を歌った曲だ。

Tony Joe White
"Black And White"
Monument●SLP18114
［1969］➔ライノ（ワーナー）
◎WPCR15111
incl.'Polk Salad Annie'

トニーは南部のルイジアナの周りの、ワニがいて、ポークが生息する沼地で生まれ育った。彼はボビー・ジェントリーの「ビリー・ジョーの歌（Ode To Billie Joe）」（＊註1）を聴いて自分の人生そのものだと思い、「ポーク・サラダ・アニー」を作ったという。歌の内容はこうだ。アニーの母親は犯罪者で、刑務所の鎖でつながれて働かされている。父親は背中が痛いことを理由に働かない怠け者で、兄弟はスイカを盗むことしかできないというどうしようもない奴だ。食べものを買うお金がないアニーは、森から採ってきたポークを料理することで家族のお腹を満たしている。悲惨な境遇に暮らす女の子が描かれているが、南部とは、こんな状況でもどうにか生活ができてしまうところでもある。

●

しかし、アメリカの南部には、そこに住む人間にしか理解できない一面もある。

俺が初めて南部のアーカンソー州を車で通ったとき、映画『イージー・ライダー』（69年）を思い出し、デニス・ホッパーやピーター・フォンダみたいに撃たれてしまうのではないかと頭の片隅で考えていた。すると、後ろから1台のパトカーが俺の車をつけてきた。俺はスピードを出さないように気をつけて走っていたが、20分ぐらい経ったころ、パトカーが赤いライトを回し、サイレンまで鳴らしてきた。俺はビビりながら、車を止めて窓を開けた。すると警官が俺のドアの少し後ろに立ち、車の免許を見せろと要求してきた。財布から出して警官に示すと、彼はこう言った。〝カリフォルニアか？　カリフォルニアにはフルーツとナッツしかいない、お前はどっちだ？〟。

冗談だろうと思ったら、警官は真顔だった。隠語でフルーツはゲイを指し、ナッツは頭がおかしな人を指す。車を止められた理由は、カリフォルニアで買ったビートルにナンバー・プレートがなかったことが原因だった。カリフォルニアではプレートが送られてくるまで、窓にナンバーを書いた小さな紙切れを貼っておくだけでいい。そう説明すると、アーカンソー州では通用しないと言われた。キップを切られて警察署に行き、罰金を払うか裁判に出るかどっちかにしろと言われた。俺は知らばっくれて、そのままテキサス州へ向かった。それから、俺はアーカンソー州には行っていない（笑）。

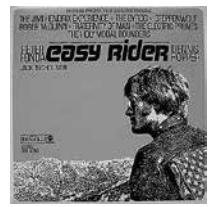
映画『イージー・ライダー』は大金を手にした若者二人が改造したバイクに乗り自

＊註1＝〈アメリカン・ロック・リリック・ランドスケイプ〉第25回参照

●ジョージ・カックル／GEORGE COCKLE　1956年、鎌倉生まれ。音楽プロデューサー／

由を求めて旅に出たが、行く先々で保守的な人々の拒絶に遭い、南部に向かったところでレッドネック（＊註2）に大した理由もなく殺されてしまうという物語だ。炎上するバイクからズーム・アウトしていくエンディングの画面に広がる美しい風景とは裏腹に、南部にはよそ者は受けつけないという気質があることも事実だ。もちろん、受け入れる人たちも存在するのだが。

ラスト・シーンでは、トラックに乗ったレッドネックの二人が、最初はバイクで旅する若者を脅かすだけのつもりが、本当に撃ってしまい、もう一人も撃たざるを得なくなってしまった。その証拠に、一人目を撃ったときに、〝何が起こった？〟と言い放っている。また、倒れたデニス・ホッパーの身体の上に、ピーター・フォンダが星条旗のついた革ジャンをかける。これは象徴的なシーンだ。お互いアメリカ人で、敵ではないはずなのに。ヴェトナム戦争でたくさんの人が死んでいた時代に、アメリカの内部でもこんなことが起きているというメッセージ（問題提起）も込められている。バックではロジャー・マッギンの**「イージー・ライダーのバラード（Ballad Of Easy Rider）」**が流れてくる。川は流れて海まで行く、そこは俺が行きたいところだ。自由になれる場所を探しているのだろう。みんながそれぞれに自由を探す。撃った南部のレッドネックも、回りに左右されず、そのまま生きていきたい。それが彼らの自由だからだ。求める自由のすれ違いとでも言おうか、このラスト・シーンは、とても奥深いアメリカ人の心理を表わしている。



“Easy Rider（Music From The Soundtrack）”
Dunhill/ABC●DSX50063［1969］➔ゲフィン（ユニバーサル）◎UICY75724

incl.‘Ballad Of Easy Rider’ by Roger McGuinn

●

ふつうのアメリカ人が描く南部のイメージはこうだ。教育がない。無知である。右翼ばかり。貧しい。やる気がない。のんびり生きている。今でも人種差別がある社会。そして髪の毛を伸ばしているのに、レッドネックである。もう散々な言われようだが、実際にこんな感じなんだ。

そんな南部のイメージの曲を、ロサンゼルス生まれのランディー・ニューマンは、一枚のアルバム『グッド・オールド・ボーイズ』にまとめた。ランディーの目を通し、南部に住む人々の生活や、彼らの考え方を描いている。1曲目の**「レッドネックス」**は、北部から馬鹿にされている南部の様相を皮肉っぽく描きつつ、実はアメリカ全体の人種差別問題を扶った彼の代表曲だ。この曲については、〈アメリカン・ロック・リリック・ランドスケイプ〉の第20回で紹介しているので、読み返してみてほしい。

2曲目の**「バーミンガム」**は、ワーキング・クラスの男がテーマ。男は小さな家で妻や犬と暮らし、工場で一日中こき使われている。庭にこしょうの木があるだけで満足していて、バーミンガムはアラバマで一番の立派な街だと自慢するという、野心は全くないが地元のプライドだけは強烈な、典型的な南部男を描いている。そう、南部の人間は教育はないがプライドだけは高いというのも一般的なアメリカ人の見方だ。

Randy Newman
“Good Old Boys”
Reprise●MS2193［1974］
➔Rhino◎R2 73839

incl.‘Rednecks’ ‘Birmingham’

＊註2＝アメリカ南部の農村部に住む、貧しく保守的な白人層を指す表現。
<アメリカン・ロック・リリック・ランドスケイプ>第7回参照

©George Cockle / Record Collectors

北部と南部は、南北戦争をする前から文化が違う。〝産業の北部〟と〝農業の南部〟。当時、南部に比べ北部には黒人奴隷の数は圧倒的に少なかったし、住んでいる外国人の割合も違った。北部にはイタリア系をはじめ様々な人種も大勢暮らしていたが、南部の白人はほとんどがイギリス系だ。また、南部は南北戦争で負けて、今でもそのコンプレックスを抱えているようだ。そのあたりに、南部の人間に特有の排他性やプライドの一因があるのだろう。

●

南部の人たちは、話し方も違う。北部や西部よりゆっくりで、川が呑気に流れているように、母音をのばす。言葉にも訛りがあり、時々何を言っているのかわからなくなる。その南部訛りをテーマにしたのが、トム・ペティ&ザ・ハートブレイカーズの**「サザン・アクセンツ」**。トムが85年にリリースしたアルバムの、タイトル・トラックだ。ここではトムが〝アクセンツ〟という言葉に引っ掛けて、南部特有の発音や南部人らしさを歌っている。

Tom Petty & The Heartbreakers
“Southern Accents”
MCA●MCA5486［1985］
➔MCA◎MCAD5486

incl.‘Southern Accents’

ちょうどいい機会なので、アメリカの最も多くの地域で使われている、この南部訛り（Southern Accents）について、少し説明しておこう。メキシコ湾と南大西洋に面する州をはじめ、オハイオ、メリーランド、デラウェアの南の部分まで、広範囲にわたる。不思議にニューオーリンズとフロリダの南の部分は入っていない（ニューオーリンズにはフランス訛りがあり、フロリダにはキューバからの影響がある）。トム・ペティはフロリダ出身だが、北西部の南部訛りの地域の生まれなんだ。テキサスとオクラホマも正式には南部ではないが、この訛りを話す。30年代、ダストボールと呼ばれる砂嵐がテキサスとオクラホマの農業に大きな被害を出したとき、大勢の人々がセントラル・ヴァリー（カリフォルニアの中部）に移り住んだ。そのため、カリフォルニアのベイカーズフィールドやカーン郡の人々は、南部訛りの英語を話す。カントリー・ロックの元祖、テキサス生まれのバック・オーウェンズもオクラホマ生まれのマール・ハガードも、この英語を話す家系だ。

余談が長くなったが、南部訛りを話す地域には、一種独特の生き方がある。この曲でトムは故郷のことを、若い奴らが田舎と自嘲し北部の連中が馬鹿呼ばわりするところ、と歌う。でも、そんな俺たちの土地には、アクセントが違うのと同じように、生き方にも違いがあるのだと歌う。例えば、アトランタのトラ箱（drunk tank＝警察の泥酔者保護室）だって俺にとってはモーテルの部屋みたいなもんだ、というふうに、南部流のタフな生き様を表現している。誰が何を言っても、俺たちの生き方にはアクセントがあり、それは変えないと誇らしげに宣言しているんだ。

ここまで、南部人特有のメンタリティや南部人に対する一般的なイメージについて語ってきたが、自分なりに、マイペースに生きて、木の間を通る風に耳を傾けるような、のんびりとした暮らしを望み営むのが南部流の基本だ。もし南部へ行くことがあったら、そんな空気をぜひ感じ取ってもらいたい。先にも触れたような、よそ者は来なくていいというような雰囲気もあるにはあるが、それはほとんどがヤンキー（北部人）に対するもので、日本人なら大丈夫だ。